



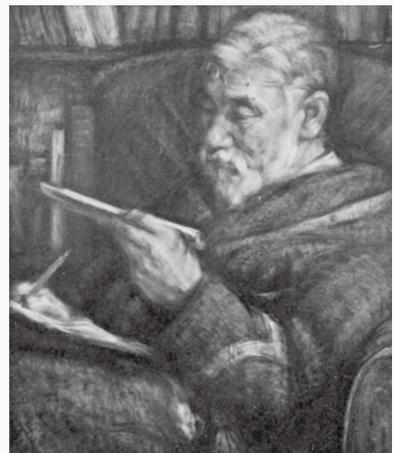
【25年コンマ零】

「定年」身をもって行動

「私の最も気持ちの良かった日は、60歳の還暦の年、それまでのあやまちをお詫びして、役目のお許しを願った時でありました。いつまで経ってもわすれられません」

1951（昭和26）年、94歳の田中館愛橋が雑誌に語った思い出は、当時世間に大きな衝撃を与えた東大の辞職騒動だった。

その日、1916（大正5）年10月7日、東京小石川植物園で田中館の東大教授在職25周年祝賀会が行われた。各界の著名人300人を迎えての盛大な会は浜尾新男爵の開式の辞で始まり、東大総長山川健次郎らの祝辞が続



画家中村誠が描いた田中館愛橋の肖像画。「計算尺」を持った田中館らしいポーズを取っている1916年（二戸市田中館愛橋記念科学館提供）

いた。

やがて満場の拍手の中、田中館が壇上に立ち答辞を行った。感慨深げに辺りを見回し、少し沈黙の後、驚くべき発言をした。

「諸君、……私はこれを25年コンマ零の記念会として謹んでお受け致します」。列席者の戸惑いをよそにさらに言葉は続いた。

「明治24年初めて教授に任ぜられてから何ら学界に貢献することもなく今日に至った。私の如き浅学のものが今日まで大学教授の席を汚したのは、斯

界にまだ人を得なかった時代の為であったが、老年者が厚かましく教授の席を占むる時でないと考えて、今朝大文学本部に辞表を提出してきました。この宴はわたしにとって別れの宴であります。どうか辞職を許して戴きたい」

一同は仰天し、代わる代わる田中館の元に行き留任を求めた。しかし、田中館の意志は変わらなかった。とりなしに努めた山川総長も空しく、辞任を認める代わりに次の三つの条件を示し妥協した。

①将来航空研究所設立の上はその本官たるべきこと②理学部は辞職後講師たるべきこと③免官発令は少しく後るべきこと。そして翌年4月に依願免官の辞令が出た。6月には東京帝大名誉教授の称号を授けられた。田中館はこれを喜んだ。

当時、「停年退職」の定めはほとんど無く、東京帝大でも定年制度が検討されたが実現しない。ついに田中館が身をもって行動したからその反響は凄まじかった。山川総長はその後定年制度に取り組みが、在職中には実現でき

なかった。

田中館は祝賀会の年に、下斗米秀三（火山学者）を婿養子に迎え公私ともに後進に道を譲ったが、当人はこれでやっとローマ字運動に専念できると意気盛んであったという。あまりに元氣すぎて自転車で転び大腿骨を骨折している。

（中村誠 田中館愛橋会事務局長）

【ミニコラム】 気鋭画家が肖像画

計算尺でポーズ

田中館の在職25周年祝賀会で、当時気鋭の画家中村^{つね}誠が田中館の肖像画を描き、贈った。弟子の寺田寅彦によると、田中館らしさを出すため、「計算尺」を持ったポーズに決まった。しかしちっともじっとしていないので、デッサンの間、寺田が話し相手になってなだめた。

そろばんの時代に、画期的な計算機能を持った計算尺を日本に初めて持ち込んだのは田中館だった。